

ゴシックは 魔法乙女

さっさと契約しなさい!



悪魔編第0章 忘れられた少女



それは、とある過去の物語。
忘れ去られた、傷のお話。

罪を背負い、絶望の中で、その命を絶つた少女たちがいた。
その魂は魔界へと墮ち、それぞれの能力を持った、大いなる悪魔の手で拾い上げられた。
火と、氷と、風と、光と、闇の。五人の大悪魔たちに。
そして、それぞれの力を分け与えられ、悪魔として生まれ変わったのだった。

それから。

悪魔となつた少女たちは、とある男の元で、姉妹として育つた。
魔界に流れ着く以前の、その、魂の物語。

正んだ目的を完遂するための、その道具として……。

だが、これから語られるのは、それよりも前のお話。

それぞれの傷の、……封印された過去の記憶の、そんな、お話。

「燃え広きた願い」

——おなか、すいたな……。

村の人たちが、大声をだして、ボクを探し回つてゐる。ボクと、あの男のことを。

見つかつたら、きっと、ひどい目にあわされる。

……でも、見つからなかつたとしてわ。どうすればいい?

ボクにはもう、とにかく、行く場所なんかない。

あいつが、ボクたちのところにやつてきたのは、ちょっと前のことだった。

ボクたちはみんな、親はいなくて、村はずれの廃墟に住んでた。力みの中から使ふそなものを集めたり、畠の手伝いとかして、食べ物をもらつた。だけど、いつだつてほんのちょっとだ。だからボクらは、いつだつてお腹がペコペコだつた。

あいつは、そんなボクたちの様子を、しばらく観察していたみたいだった。

それから。お祭りの、少し前。ボクに「う」叫びつけてきた。

「俺の仕事をちょっと手伝えば、仲間とお腹いっぱいの」駆走が食べられるぞ。どうだ、やつてみないか?」

——その言葉は、とっても魅力的だったよ。でも。

「あんたの仕事って、なんだよ。ヤバい」とない、嫌だよ!」

「たいした」とじやない。今度祭りのとき、禮物を倉庫から盗むだけだ。祭りの夜はみんな広場に集まつてゐるから、バレやしないぜ」

ボクは顔をしかめた。その禮物のことは、ボクだつて知つて

る。小さくて貧乏なボクの村の一一番の名物だ。このあたりにしかない、特別な虫からとつた糸で織つた布は、きらきら金色に光つて見える。とってもきれいなんだ。

「でも、あれは、みんなが大事にしてるものだよ……?」

「そんな」と心配しなくなつて、虫からいぐらでも糸はとれるんだし、ちょっとくらい盗んだってかまやしないさ!」

「う、うん……わかったよ……」

あいつの目が、一瞬ギラついて見えて、怖くて、ボクは額いた。断つたら、ひどい目にあわされる気がしたんだ。

「無事盗めたら、俺がかわりに布を売つぱらつて、めいっぱい食い物を買つてきてやるよ。それで、『う』のみんなでわけりやいい。名案だろ?」

「まぐろかば、みんなで」駆走が食べられる。……それなり、ちょっとといのうつて……ボクも、思ったんだ。

あいつは、むづからか、可愛い服を持ってきた。お祭りの村を歩くときに、怪しまれなじよう!」

それは、ちょっとびり、嬉しかつた。お祭りのとき、村の女の子はみんな、可愛い服を着るんだ。……ボクは一度も、着たことなんて、なかつたけど。だからそれは、はじめての、おめかしだつた。

それから、あいつと一緒に、村に行つた。

お祭りの村は、あちこちにたかれたかがり火で、夜だつていうのに明るかつた。みんな、浮かれた顔で、楽しそうに歌つたり踊つたりして、とっても賑やかだ。

これなら、盗んだって、気づかれないと嬉しいだろう。ボクは少し、

ほつとした。

——予想通り、途中までは、「うまいといったんだ。ボクが」つ
そり倉庫に忍び込んで、織物を盗み出すまでは。

「でも、そこ」で。

「じゃあな、おまえは「」じで用済みだ。……おいー「」じに犯
棒がいるぞ!! 村はずらの廃墟に住んでる、小姐だ!」

「え?」

ボクが驚く暇もなかつた。

あいつは盗んだ布を抱えると、あつとう間に闇夜の森に消
えていく。ボクは、あいつの声で集まつてきた村人から、必死
に逃げるしかなかつた。

「やめてよー。ボクは、…………」

やってない、なんて、言えない。

「あの汚い村はずれのガキか。金に困つて、盗んだんだな」

「前から、やりかねないと思つてたんだ。おい、でて「」いー

嫌だ。

嫌だ嫌だ嫌だ!!

捕まりたくない!

そう、必死に逃げるボクの足が、なにかにつまずいて転んだ。
まづい。そう思つて振り返つたボクの目に映つたのは、倒れた
かがり火と、燃え上がる炎、だった。

ボクがつまずいたのは、かがり火を支える棒だったんだ。それがバランスを崩して倒れて、炎はそのまま、枯れ草に燃え
移つていく。

「や……だ、だめだよー。だめ!!」

「」のままじゃ、大火灾になっちゃう。みんなが、困る。

必死にボクは手を振り回したり、足で踏み消そうとした。で
も、無駄だった。ただ、やけどするだけで。

「あいつ、ついに火をつけやがった!」

透くて、そんな声が聞こえた。違う、違うのに。

ボクはただ。

みんなで、美味しいものを食べたかっただけ。

一度くらい、みんなで笑つて、ご馳走を食べられたらいい

なつて、願つた、だけ。

でも、それは、いけないとだつたのかな。

煙で、目が開けられない。涙が出ても、そんなんじゃ、」の

炎は消せない。

熱くて、熱くて、息が苦しい。

でも、もう、いい。

逃げても、どうせ、無駄だから。

どこにも行く場所なんてない。

誰にも信じてなんてもらえない。

それなら、このまま。

炎に飛び込んで、焼かれちゃうほつが、いい。

ボクにはもう。

居場所なんて、ないから。





「氷点下の華」

ええ、最後まで。

雪が、好きです。冷たくて、優しいから。
殴られて痛んだ頬も、手足も、雪は冷たく癒やしてくれるの
です。

取るに足りない、わたしの話です。

寒い寒い北の国で、わたしは生まれ育ちました。あまり裕
福ではない、ひどく寒く、寂れた田舎です。
母は、出稼ぎに出たまま、もう何年も帰ってきません。父は、
……よくある話です。酒に溺れ、飲んでは暴力を振るう、そん
な人でした。

雪に閉ざされた家の中では、父の暴力からわたしを守つて
くれる人など、いません。

たったひとつ、わたしの心を慰めてくれたのは、母が残し
て置いてくれた本でした。言葉遊びの詩を、何度も読み返し、
覚えるうちに、自分でもそれを考えてみようと思いました。

「お父さん、聞いてほしいの」

披露したのは、わたくしなりに考えた、言葉遊びの詩。けれ
ども、父はさまって、田を血走らせて、わたしを怒鳴りつけ
ました。

「なんだそりゃ。自分の知識の自慢か? くだらない!! そう

やって、俺をバカにした口をしゃがって……」

「ね、違うの。やめて、……さやあっ!」

——父には、わたしこの「の楽しみは、最後まで理解しては
わいえませんでした。

「ちっ。しけた家だな。なんにも残ってねぇ」
いつものように雪が降る、いつものように寒い夜でした。
かつて父の友人だった男は、うちに入りなり、強盗にその肩
書きを変化させ、父を殺害しました。

今、父は、わたしの田の前で、冷たく横たわっています。
……ひどい話です。わたしは、そのカラダを、ただの物体
としか見ることができませんでした。わづ、動かない。もうわ
たしを傷つけない、冷たい、もの――。

「お? なんだ? りや、引き出しの奥に……なんだ、眼鏡
か」

家探しをしている男が、父の机の引き出しだから取り出したの
は、華奢な眼鏡でした。かつて、わたしの母が、かけていた
もの。おぼろげに、記憶のなかにあったものでした。

まだ、あれが残っていたなんて……。

強盗が興味をなくし、投げ捨てたその眼鏡を、わたしは拾
い上げて、かけてみました。

わたしの田は、幼い頃から殴られてていたためか、ひどく
視力がおちていきました。けれども、母の眼鏡をかけて、よつや
く世界は、その姿をわたしの前にはっきりとあらわしてくれ
ました。

「こんなにも、家の中は、寒々しく薄汚れていて。
こんなにも、父は、年老いて枯れたものになっていたのかと。
そして、

……わたしの手の隣で!!」強盗が置いた拳銃が、あ

るところだ。

「酒だけは、ちょっとはあるようだな……安い酒だが、しかたない。明日になつたら、あの娘を約束通り売り飛ばすか。あいつの顔(ほ)のむき見た目はいいし、その金がありや、しばらくなつ……」

強盗は、わたくしに背を向けて、父の酒を飲んでいました。わたくしがほとんどの目が見えず、おとなしいから、油断しました。背中でした。

あつかましく、無遠慮で、酔っ存在でした。

「…………」

わたくしが、拳銃の引き金をひくことに、なんのためらいがあつたでしょうか?

強盗の男もまた、冷たい、静かな存在となりました。

ギイイ……。

軋んだ音をたてて、扉が開きました。

わたくしは、雪の上に倒れ込みました。

不思議なほど、体は温かく、雪は柔らかに感じられました。

外の世界へと旅だったのです。

雪はいつの間にかやみ、じいまでも続く雪原は、満田の光に

白く輝いていました。

速くに、針のような木々の立ち並び、丘が見えました。

あの丘を越えれば、雪のない、春の国があるそうです。

本には、そう書いてありました。

優しい光が溢れ、鳥と蝶が舞い、花が咲き乱れる、そんな国

が。 わうと、囁む、やいじらねのでしゃう。

それに遅いないです。

わたくしは、雪を踏みしめて、歩いて行きました。

徐々に体温が奪われ、足の指先が冷たく凍り、じんじんと痛みました。吹く風に、耳はちぎれそうです。拳銃を握った指先は、すでに感覚はなくなりました。

それでも。

あの丘をこえれば、きっと。

——やがて、足が、動かなくなりました。
わたくしは、雪の上に倒れ込みました。

不思議なほど、体は温かく、雪は柔らかに感じられました。

——なんて、美しいのでしょう。

そして。……なんて、世界とは、無慈悲なのでしょう。

本当に。最後まで……。

本当に。最後まで……。



「なりそ」ないのヒロイン

お姫様に、なりたかったんです、わたし。素敵な王子様が迎えに来てくれる、そんな、お姫様に。

「今日も遅くなつちやつたわね。大丈夫?」

「全然、平気。……お母さん」

「もうね。今日はちょっと、撮影が長引いたわね」

「うん。で、でも、見てて、勉強になつたから……」

今日は、ドラマの撮影でした。

わたしは、小さい頃から、子役として、雑誌やテレビのお仕事を、してました。

人前に出るのは、ほんとは、苦手だったけど……。

「それはよかったです。……今日も本当に素敵だったわよ。貴女は、お母さんの自慢だから」

お母さんの細い指が、わたしの髪を撫でてくれます。それが、

とっても、嬉しい。

優しくて、きれいな、お母さん。たった一人で、わたしのこ

とを育ててくれている、大切な、お母さん。

お母さんは、人気の女優です。今日は、撮影の見学だったけ

ど……、いつか、お母さんと一緒に、舞台で共演することが、

わたしとお母さんの夢、でした。

わたしは頑張れば、お母さんが、喜んでくれる。わたしの、

側に、いてくれる。

だから、そのためなら、わたし、……苦手な」とでも、頑張

れました。

「おい」

呼び止められたのは、突然でした。

何が起きたのかは、全然、わかりませんでした。

ただ。

「ひ……ッ！」

強い力が、わたしの腕をつかんで、頭が、がんって、痛みま

した。

「やめて、この子には、……つぐ……ッ！」

お母さんの、悲鳴。ぐぐわった、音。なんの、音? 初めて、

きいた、音でした。

それは、……お母さんが、殴られる、音。

わたしが、踏みつけられる、音。

痛い。苦しい。怖い。やめて。助けて。

助けて助けて助けて助けて。

——だけど、声は、出ませんでした。押さえつけられて、な

にも、できませんでした。

誰も、助けてなんか、くれませんでした。

「さあみろ! これは、天罰なんだよ」

顔を隠した人たちのうち、そう言って、髪をかきあげた男の

子が、いました。

……わたしは、その仕草を、知つて、いました。

だってそれは、いつも見つめていた、「彼」の仕草、でした

から……。

風の、とっても強い口、でした。

ただ、ひとつだけ。

お母さんにも、ナイショのことが、ありました。

わたしには、……す、好きな人が、いました。

同じ学校の、クラスメイトの男の子です。

あまり、話したことは、ないけれど……、入学して、すぐの

ときに、教室がわからなくて困っていたら、助けてくれた、男

の子でした。

ちょうど、悪い仲間とつきあつて、いるつていう噂も、あつたけ

ど……でも、あのとき、優しく助けてくれた彼のほうが、本当

だつて、思つてました。

わ、わたしも……学校で、へんな噂をたてられたり、しじま

したし。

お仕事のために、大人の人と、つきあつてる……とか。悪い

ことをして、お金をもらつてる、とか……。

す「い」、いやでした。だけど、わたしが、ちゃんと頑張つて

いれば、きっと、みんな、嘘だつてわかってくれるって……そ

う、思つて、我慢してました。

夜も更けて、いきました。タクシーを降りて、家まで戻る間。このお仕事が終わったら、少し、お休みがもらえる予定、です。久しぶりに、学校にも、通えます。だから、その間に、彼に告白したいって……そう、思つてました。

細い道は真っ暗で、まわりのお家も、今は明かり一つついていません。

わたしは、学校に行きました。

病院を、退院できたからです。

お母さんは、まだ、入院中です。でも、顔には、大きな傷が、

残つてしましました。……もしかしたら、このまま、ずっと、

残るかもしれないって、言されました。

マスクの人たちが、顔がしつづいてきましたけど、校門の

ところで、別れることがてきて、よかったです。

……教室に行く前に、「彼」を探しました。

さきたいことが、あつたからです。

彼は、中庭にいました。私に気づいて、生徒たちが何人が、

後をついていましたが、わたしは、まっすぐに、彼に近寄

りました。

わたしに気づいた彼の、その口元は、いびつに震えていまし

た。やっぱり、……彼が、犯人の一人だったんだ、と。わたし

は、確信しました。

彼の答えは、「う、でした。

——だっておまえ、悪いことしてたんだろう。裏工作して、ラ

イバル漬したり、偉いやつには媚び卖つたりしてさ。だから、

天罰だよ。かわりに、俺たちがやつてやつただけだ。

そんなことは、してません。

でも、……その噂を、彼は、信じた。

悪い魔女の言葉を信じてしまった彼は、もう、……王子様じゃ、ないです。

そんな嘘にだまされて。

わたしと、お母さんの、一人の夢を、台無しにした、なんて。

……許せません、でした。

どうしても、どうしても、どうしても、どうしても、どうしても。

わたしの夢を奪ったひとを、許せなかつた。

……好きだった、のに。こんな人だった、なんて。

わたしは、そっと、彼に近寄りました。

ひきつった顔で、彼は、私を見つめています。

……わたしが、怖いですか？

大丈夫、ですよ。

あなたも、わたしも、一緒に、おしまるにゅうだけ……どう

から。

そのために、ちゃんと、用意してきました。

——あなたを、殺すための、道具。

「……きやあああ！」

まわりの子の悲鳴が、なんだか、うるさいです。

わたしと、彼を、刺したからでしょうか？

返り血が、いっぱいいっぱい、飛び散ったからでしょうか？

それとも、わたしを妬んで流したテーマが、こんな結果になつたことが——怖くなつたんでしょうか？

でも、もう、いいんです。全部、なんでも、いいんです。

王子様は、もう、いません。

だから、わたしは、お姫様には、なれません。

わたしは、屋上に行きました。金網を乗り越えるのは、

ちょっとだけ、大変でした。

みんなの大騒ぎは、全部、風の音が消してくれました。
なので、とても、静かな気持ちで。
わたしは、地面へと、飛び降りました。

ほんの少しの、間。わたしを包み込んでくれた風は、
とっても、心地よかつた、です。



「一人のショリエット」

——懺悔しなさいって言われたけど、意味わかんない。

誰に？ どうして？ なにを、あたしが、謝らなくちゃいけないの？

……むうむ、なにもかもなんでしょうが。

あたしの住んでる街には、色んな人が住んでる。お金持ちも、貧乏な人も、色々。

街の一番の自慢は、大きな教会よ。街の人たちは、みんなその神様を信じてるし、眞面目に暮らしてる。でも、そのせいで、他の地域の人たちとは、あんまり付き合いがないよね。

次の自慢は、あたしかしり？ 街で一番可愛い、明るい人気者って評判だったのよ。

まあ、窮屈で、退屈な街だけど……でも、みんなあたしに優しかったし、あたしを愛してくれた。おしゃべりしたり、ゲームしたり、そんな時間が楽しくて、あたしもみんなが好きだったわ。

だけど、あたしにひいて一番、誰よりも好きなのは、あの子。

街でも折りのお金持ちのねつねの、お嬢様。

おじとやかで、賢くて。おしゃべりで勉強嫌いのあたしとは正反対。

出張ったのは偶然だったわ。でも、あの子とあたしは、あつと/or間に、恋に落ちた。同じ女の子だからおかしいなんて、ちつとも思わなかった。

あたしには、あの子が必要で。あの子にむ、あたしが必要

だってこと。すぐにわかったのよ。

あたしたちは、秘密の場所で、何度も一人きりで会ったわ。

どの時間も、とっても大切で、幸せだった。

——なのに。

誰かが、それを、壊したの。

あたしの飼っていた猫。小さな、可愛い、哀れな子。その子を殺したやつがいた。死体は、あの子の元に届けられた。

それだけじゃない。

あたしが、魔女たつて噂が、街に広がっていた。

女の子を好きなんて、おかしいんですね。神様に、許されないんですって。

——そんなこと、知ったこつもないわ。

神様に許されなくたっていい。

あたしとあの子の気持ちを、誰に許してもいいの必要があるの？

わかるてるわよ。そんな考えが、そもそも、魔女としての証明だっていうんでしょ。

噂が広まつてからは、あつといつ間だったわ。

街中が、あたしに手のひらを返した。ちやほやしてくれていた男の子たちも、大人たちも、みんな。

誰もが、あたしに背を向けた。あたしに石を投げ、唾を吐いた。

許されない魔女だと、あたしを責め、教会に訴えたの。



独房に閉じ込められて。

魔女として、あたしは、火あぶりになると变成了。みんな、それを楽しみにしてると、看守には教えられたわ。

……くだらない。

なんて、醜くて、浅はかで、つまらない人たち。

でも、そんなこと、どうだっていいの。

あたしが気がかりなのは、あの子のことだけだった。

——今朝は、朝から温かかった。独房の天井近く、明かり取りの窓から差し込む日差しも、キラキラ、眩しかったわ。

その光を浴びて、檻の向こうに、あの子が立ってた。

最初は、幻かと思ったわ。だけど、そうじゃなかつた。

なんでだか、あの子の服は赤く汚れていたけど、そんなのはちつとも気にならなかつた。可愛くてきれいな、あたしの大好きな、人。

「間に合つてよかつたわ。……ねえ、これを受け取つて?」

そう言って、あの子が差し出してくれたのは、ネックレスだつた。なんだか、不思議な形の。だけど、見覚えがある。「私のネックレスとあわせると、蝶の形になるのよ。あの、可哀想な子の首輪についていたチャームを、二つにわけたの」

そうだ。これは、あたしが選んでつけてあげた、あの猫の首輪の飾りだわ。

「……ありがとう。これで、あの子も、ずっと一緒にね」

「ええ。それから……これも」

渡されたのは、小さな瓶。透明な液体が、入つてゐる。中身が何かなんて、すぐわかるよ。だって、あたしだつて、

貴女の立場なら、そうするもの。

「うん。わかつたわ」「……わう、ずっと、一緒よ」

「ええ、そうよ。ずっと、一緒よ……」

口に含んだ毒は、すこく苦かつた。あの子が手を伸ばし、あたしと唇をあわせる。一人分に、この毒は足りるかしら? あの子は賢いから、きっと、大丈夫よね。

ねえ。生まれ変わつたら、あたし、くだらない人間なんかじゃなくて、猫になりたいわ。自由に楽しく、愛されて暮らす

の。素敵でしよう?

それから、絶対に。

また、貴女と出会うの。

それで——幸せい、なるのよ。一人で、きっと。

ねえ、貴女。大好きよ……ずっと。

「人とのショリエッシュ」

清潔なりネン。整えられた部屋。神様に祈る、静謐な時間。
「嘘をついてはいけない。神に背いてはいけない。いつも誰よ
りも正しへ、愛を持って生きなさい」

「はい、わかりました」

幼い頃からずつと、私はそう言われて育ったの。

だけど、すぐに殴打いたわ。

——大人の物のその言葉(ノモ、欺瞞と腐臭に満ちていてるって
ソル)。

閉鎖された田舎のコミコーティである(ノ)の街で、少しでも上の
立場になろうとばかり考えてる。彼らの頭の中にあるのは、
体裁と金儲けの(ノビ)だけ。
なんて、醜い。

私ひとり、綺麗なものは、たった一人だけ。

いつだって素直で、明るくて、可愛いしきあの子だけ。

彼女といふときは、私は心から安心したことができる。嘘のない
優しさが、愛おしかった。

なのに。

ある日、届けられた小包。何の気なしに開けたその中身は、
あの子の大切にしていた、毛足の長い猫の死体だった。

その恐ろしさに、私は箱を取り落とし、氣を失ってしまった
わ。

だつて、わかったの。

その猫は、あの子の未来への予言。そして同時に、あたしと

あの子の関係を知っているという、脅迫。

案の定、それから、あの子が魔女と告発されて、投獄される

のはすぐだった。

それを仕組んだ犯人は、私にはわかつていた。あの男。あの

子にしつこく言い寄っていた男だ。

(ノ)のあたりを支配する、大地主の息子。私の家族と同じ、ブ

ライドばかり高い、腐ったやつよ。——だから(ノ)そ、あの子に

交際を断られたことが、面子を潰されたようで、許せなかつた

のでしょうけど……。

そして、私も。

「おまえなぞ、娘でもなんでもない！ 狂らわしい魔女め！
我が一族に(ノ)のような汚辱など、許されるわけがない！」

散々に父親に殴られて、納屋へ閉じ込められた。

明日には、あの子と同じように収監されるか、ある(ノ)は……

密かに、殺されるかもしれない。

「……痛い……」

殴られた頬が、痛む。

でもそれ以上に、胸が痛くて。

あの子が、可哀想よ。

どんなに辛い思いをしてるだろ(ノ)。これからも、どれだけ

ひどい目に遭わされるのだろう。

みんなに弓きゅり回されて、嘲笑されて、死ぬまで見世物に

されるに違いない。

その様を思い浮かべるだけで、涙が溢れて、苦しそう。

死にたいと、思ったわ。



もうこんな世界、生きていても、仕方がないもの。

——ああ、でも。

このままでは、済まらない。

私の胸の奥に灯った、小さな、昏い炎。

あの子をこれ以上、傷つけさせたりしない。私の手で、すべて、終わらせてみせる。

そう、心に決めて、私は闇夜に乘じて納屋を抜け出した。

私とあの子だけの秘密の場所には、色んな宝物が隠してあった。お菓子も、毒も、ぬいぐるみも、刃物も。

その中から、必要なものを選んだ。迷いなど、なにもなかつた。

それから。

顔を隠して、使用人に声をかける。女が密会を望んでいると伝えさせると、あの好色な男はほいほいと屋敷から出てきた。

その太った体に、私は何度も、短剣を突き刺した。両手が血と脂で滑ってやりにくい。汚い悲鳴が響いて、まるで豚みたいだと思ったわ。

それから。

私は、あの子が捕まっている監獄に、「うそりと忍び込んだ。夜明け前の、一番暗い、寒い時刻に」。

私の姿にあの子は驚いて、……でも、微笑んで迎えてくれた。可哀想に、薄汚れて、やつれてしまったけど、でも、やっぱり、誰よりも綺麗で可愛らしい笑顔だった。

渡したのは、蝶の片翼のネックレス。あの子の猫がしていた首輪のチャームを、二つに分けて、作ったの。

この先も、あの子の魂も、そばにいるように。

それに、蝶は、死者の魂を運ぶものだから。

私たちの魂が、決してはぐれないようにな。

手渡した毒も、すぐにあの子は理解して、頷いてくれた。そうよね。こんな世界も、嘘ばかりの人間も、もういらないわ。

一人きりで、旅立ちましょうね。

「……うう、ずっと、一緒によ」

「ええ、そうよ。ずっと、一緒によ……」

もう一度と、私から、離れたりしないでね。

大好きよ……ずっと、ずっと、ずっと。





ゴシックは魔法乙女～さっさと契約しない!～
悪魔編第0章 忘れられた少女

著者 篠原まこと
山内シロウ

挿絵 【yae】

監修 若林明
古川守

